（別紙2）

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　　藤井　隆道

ヴェーダの教示に基づいて祭式を行いダルマの実現をはかるバラモン教の聖典解釈学の伝統からミーマーンサー学（M 学）が生まれたが、その根本典籍『ジャイミニ・スートラ』の冒頭には祭式文献ヴェーダの権威の合理的弁証を企てた「思弁篇」があり、同篇への注釈活動を核として M 学の哲学的思惟が発達した。現存最古の注釈『シャバラ註』の思弁篇部分に対する復注の形を取りつつ、緻密なプラマーナ論（認識論・論理学・言語哲学）を展開して、ヴェーダの権威を否定する仏教などからの批判に耐えうる高度な哲学的議論を約 3300 詩節にまとめたのがクマーリラ（7 世紀、K）の『シュローカ・ヴァールッティカ』（全 25 章、ŚV）である。

本論文は、正確さに欠ける G. ジャーの英訳以外は先行研究が殆どなかった ŚV 第 24 章「文論題」（369 詩節）に対して、写本三本や未出版の注釈『カーシカー』の転写本などを用いて緻密な校訂テキストを作成し（第 4 章）、全体の議論構造を正確に反映した訳注研究を行った（第 5 章、127 頁）。この基礎研究部分のみでも大きな成果であるが、さらに同箇所の議論内容を思想史的かつ哲学的に分析した第 2－3 章（243 頁）は圧巻である。

本研究が解明した点は多岐にわたるが、ŚV 文論題の内容分析として第一に特筆すべきは、語の表示機能のみから文の意味理解は説明しえず、語意間の連関には聞き手の主観的解釈の介在が必須である以上、ヴェーダの教令文のみがダルマを知る唯一の知識根拠であるとする思弁篇の基本テーゼは崩壊するという反ヴェーダ的批判に K は立ち向かいながら、他方では音素や単語の実在性を認めず、単語の意味を超えた単一不可分なる文の意味が直観されるとする文法哲学者バルトリハリの文論に対する批判にも力を注ぐという、ŚV 文論題の二つの対立軸の詳細を『ヴァーキヤ・パディーヤ』などに照らしつつ文献実証的に明らかにした点である。そして恒常的に実在する音素の集合（単語）とその指示対象（普遍一般）との間には非人為的な本源的結び付きを認めつつ、各単語の意味相互の間では、「期待」「近接」「適合性」という三条件を満たす形で、定動詞（の人称語尾）が表示する実現作用（バーヴァナー）が主要素として、他の言語要素（動詞語根や名詞など）の表示対象が「実現対象」「実現手段」「執行細目」という従属要素として連関する、教令文固有の文意構造（「祭式によって天界を実現する」）の成立が人為的要因の関与なしで説明可能である以上、思弁篇の基本テーゼは盤石である、という K の弁証論の内実を鮮やかに解明した。行為と文意が密接に関わる文論の局面を浮き彫りにした点も注目に値する。

藤井氏の論述は単なる思想紹介にとどまらず、テキストの行間に伏在する、言葉をめぐるインド哲学者たちの重厚な思索の歴史と、それを踏まえた K の逞しい議論の襞を、氏自身の明快な切り込みによって見事に再構築した、世界的に見ても画期的な逸品と評しうる。独自の用語使用や訳語の統一性などに関して若干の問題点はあるが、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しい業績として高く評価する。